

機関番号：64302

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21730143

研究課題名（和文）徳川外交の連続性－「近世」から「幕末」へ、幕臣筒井政憲に見る  
経験の蓄積に着目して研究課題名（英文）Continuity in Tokugawa diplomacy: from early to late Edo with a focus  
on Tokugawa official Tsutsumi Masanori and his accumulation of  
experience

研究代表者

佐野 真由子 (SANO MAYUKO)

国際日本文化研究センター・海外研究交流室・准教授

研究者番号：50410519

研究成果の概要（和文）：

本研究は、幕末期に展開される欧米諸国との関係を、江戸時代を通じて維持された対朝鮮を軸とする日本の国際関係の上に位置づけ、徳川幕府による外交の連続性を見出そうとしたものであり、それを体現する存在として、幕臣筒井政憲（1778～1859年）の生涯と仕事を考察の中心に据えてきた。筒井の事績に関する具体的な史料調査を基盤としつつ、筒井を基点に、幕末の動乱期において「開明派」と位置づけうる幕臣たちが、世代交代を重ねながら政策現場で受け継いだ経験の蓄積に光を当てることにより、これまで語られてこなかった徳川外交の「連続性」を浮かび上がらせることに成功したと考えている。

研究成果の概要（英文）：

This project aimed to discover the continuity in Tokugawa diplomacy, through placing Japan's late Edo international relations with the West upon its inter-Asiatic, in particular Korean, relations maintained over the Edo period. The Tokugawa official Tsutsumi Masanori (1778-1859) was particularly focused on as a figure who could represent such continuity. The project has proved to be successful in describing the continuity from an unstudied perspective, by means of shedding light on the accumulation of on-the-spot policy management experiences of "enlightened" Tokugawa officials from generation to generation starting from Tsutsumi. The entire activities have been firmly based on the historiographical research concerning Tsutsumi.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：外交史・国際関係史・江戸時代・朝鮮通信使・米国総領事ハリス・将軍拝謁・外交儀礼

## 1. 研究開始当初の背景

日本のいわゆる幕末における対欧米外交史と、それ以前の江戸時代における東アジア域内の国際関係史とは、「別の歴史」として扱われてきたと言ってよい。その一つの理由は、外交という概念自体がヨーロッパに発し、ヨーロッパ国際法の発達とともに展開したという理解のもと、日本が「外交」にかかわったのはペリーとの日米和親条約以降であると考えられ、それ以前の日本をめぐる国際関係は「外交」と見なされてこなかったところにある。

外交という言葉の解釈の問題をひとまず置くとしても、欧米諸国と、東アジア諸国を相手方とする国際関係は、それぞれ別の専門家群によって研究対象とされ、別の学問領域として扱われてきた。相手地域だけでなく、対象とする歴史上の時代に関しても、両者の間には懸隔があった。欧米との本格的な外交関係への突入が1850年代であるのに対し、日本にとって江戸時代における東アジア域内国際関係の最も重要な事例である朝鮮通信使の来聘は、1811年を最後にとだえている。40年の空白を挟み、前者は近代史につながっていく「幕末」の、後者は近代とは切り離された「近世」の歴史として、異なる専門家群によって研究されてきたのである。

こうした中、一部の朝鮮史研究者から、上記の1811年以降も徳川幕府崩壊までつねに準備が続けられ、実現に至らなかった朝鮮通信使来聘計画の実態が、議論の俎上に乗せられるようになった。報告者はこれを、「幕末の対欧米外交史」を専攻してきた者の側から、先の述べた「40年の空白」に疑問を差し挟む鍵として受け取り、史料の見直しを開始した。その結果、19世紀以降の幕府における対外政策決定者らの間で、対欧米外交と対朝鮮外交とは、別のものどころか、実務上の案件として緊密に関係し、あるいはごく自然に並存するものだったのではないかとこの着想を得たのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、上記の着想を背景に、いわば学問上の都合によって切り分けられてきた時代や、外交の領域を、本来の自然な連続性を持った姿で提示し直そうとしたものである。より具体的には、幕末期に展開される欧米諸国との関係を、江戸時代を通じて維持された、対朝鮮を軸とする日本の国際関係の蓄積の上に位置づけ、当時、現場にあった政策担当者たちの視点に帰って、徳川幕府による外交の連続性を見出すことを狙いとした。そうした連続性を体現する存在として、とく

に考察の中心に据えたのは、1778年から1859年までを生きた幕臣筒井政憲である。18世紀末、寛政の改革直後の時期に昌平坂学問所で受けた教育、1811年の文化度朝鮮通信使とのかかわりに始まり、晩年、米国総領事ハリスの来日と江戸出府にあたって果たした役割に至る、筒井の一連の事績と対外観の変遷を史料に基づいて検討することを通じて、いわゆる「近世後期」から「幕末期」への、徳川政権下での国際関係の連続性を実証することを、研究の主目的に掲げた。

## 3. 研究の方法

本研究における活動内容は大きく二つの態様に区分することができる。

(1) その第一は、きわめて具体的なレベルにおいて、筒井政憲の経歴を、本人の残した『筒井肥前守明細書』（内閣文庫蔵）を基本としつつ、他の諸史料からの裏付けを加えて詳細に把握するとともに、筒井が長い職歴の中で残した上申書や覚書等の文書を広く収集し、その対外観や政見の変遷を分析することである。

本研究以前に、先行研究の中で筒井の経歴を取り上げたものも存在するが、1840年代を中心に老中阿部正弘の対外関係顧問的な立場にあった時期や、それ以前の江戸町奉行時代など、筒井の活躍が明白である部分に、主に既存の各学問領域の範疇で言及したものであった。本研究では、今日の公務員と同様、異動を繰り返しながら昇進していく一幕臣が、その時点までの経験の蓄積をもとに、その時点で持った意見を、できる限り後世からの予断を排して追跡し、それが幕末期の仕事に結実していく様子を客観的に分析することを重視し、直接対外関係にかかわらなかった時期や、業務以外の家族関係を含め、広範な史料収集に努めた。

具体的には、公刊されている外交史料等を別として、初年度、長崎、横浜、静岡、佐賀に、第二（最終）年度、長崎、神奈川、東京、岐阜、埼玉に出張し、国立公文書館、各都・県立公文書館、歴史博物館等が所蔵する関連史料の調査を行った。

(2) 活動の第二は、以上のように収集した情報から実証しうる限りにおいて、幕末期の徳川外交が19世紀半ばに「新規に」始まったものではなく、それ以前からの蓄積——政治思想的、文化的蓄積のみならず、業務遂行上の技術的知識の蓄積を含め——にいかにか根ざしたものであったかを導き出していくための考察に他ならない。

活動としてはより抽象的であるが、下記5.

に報告する論文執筆等を通じて作業を具体化するに努めたほか、とくに平成 21 年度には、国際日本文化研究センターにおける共同研究会「18 世紀日本の文化状況と国際環境」（研究代表者：笠谷和比古教授）を重要な研鑽の場としながら研究を遂行した。

また、平成 21 年度においては、報告者が所属していた静岡文化芸術大学における文化政策学部長特別研究費補助プロジェクト「江戸時代における外交使節の登城・将軍拝謁をめぐる文化史的考察」との相乗効果を心がけて進めた。このため、同プロジェクトの枠内で実施した、東京、横浜、長崎、沖縄における史料調査も、本研究に大きく役立つことを付記しておきたい。

#### 4. 研究成果

本研究は、既述のとおり、幕末期に展開される欧米諸国との関係を、江戸時代を通じて維持された対朝鮮を軸とする日本の国際関係の上に位置づけ、徳川幕府による外交の連続性を見出そうとするものであり、その連続性を体現する存在として、1778 年から 1859 年までを生きた幕臣筒井政憲の生涯と仕事を考察の中心に据えてきた。

各年度における活動成果は次のとおりである。

(1) 初年度はまず前半において、分析の軸とした幕臣筒井政憲の事績に関し、本研究以前からの調査結果を深める形で、後半生を中心に史料調査を進め、確認を重ねた。

以上について、下記 5. にも報告した研究発表の場で関係諸氏から得たご助言を踏まえ、主に年度後半においては、筒井を基点に、幕末の動乱期において「開明派」と位置づける幕臣たちを世代を追って取り上げ、彼らの人脈を具体的にたどるといふ研究展開を試みた。別記共著書『龍馬の世界認識』中の担当部分「坂本龍馬と開明派幕臣の系譜——受け継がれた徳川の教養」にまとめたのがその成果であり、徳川幕府の外交政策担当者たちが世代交代を重ねつつ現場で受け継いだ経験の蓄積に光を当てることで、これまで語られてこなかった一つの「連続性」を浮かび上がらせることに成功したと考えている。このためにはとくに、長崎（主に長崎県歴史博物館、三菱重工長崎造船所史料館）、横浜（主に開港資料館）、静岡（主に静岡県立中央図書館）での調査が役立った。

(2) 初年度の研究を通じて、「近世」と「幕末」をつなぐ位置にある筒井政憲の重要性があらためて認識されたが、第二年度は前半において、筒井が大きな役割を果たした 1857

年の江戸城における米国総領事タウンゼンド・ハリス迎接儀式を、1764 年の宝暦度朝鮮通信使迎接儀式と比較する形で、史料に基づき詳細に検討した。第 13 代将軍家定によるハリスの迎接は、本研究以前から筆者の論文等で取り上げてきたものであるが、今回の分析により、幕末外交を担当した幕臣らの発想の中で、朝鮮通信使の先例が当然の基礎として生きていたことをきわめて具体的に実証しえたと考えている。これをまとめたのが、別記の共著『一八世紀日本の文化状況と国際環境』所収の論文「引き継がれた外交儀礼——朝鮮通信使から米国総領事へ」であるが、同時に、やはり別記のソウルにおける学会でこの成果を発表し、韓国人研究者からも大きな関心を持たれ、議論の機会を得たことは、報告者の研究の進展にとって貴重であった。

年度後半には、筒井政憲自身の生涯にさらに踏み込み、関連史料の可能な限り網羅的な収集ないし所在確認にあたった。外交政策の面における筒井の業績や考え方の背景をより深く理解するために、むしろ外交上の仕事に直接関係していなかった時期の状況を把握することに注力したが、日本全国を対象に情報を集めた結果、とくに、東京都はもとより、埼玉県および岐阜県の公文書館にて、江戸町奉行時代の史料を多く発掘することができた。ここには業務面のみならず家族関係の情報も含まれ、これらによって、筒井という人物の像はきわめて立体的になったと言える。

次項記載の論文等は、基本的に平成 22 年度前半までの研究成果を反映したものであるが、今後、後半の成果を含めた論文、書籍の執筆を予定している。とくに、筒井を一つの起点とする開明派幕臣の系譜が、本研究を通じて、永井尚志や岩瀬忠震から、勝海舟を経て坂本龍馬までつながったことは、龍馬を経てさらに薩長の「近代」政府へとつながるものをええない徳川開明派の位置を暗示するものであり、それを考究していくという大きな課題を新たに投げかけられたと受け止めている。また、本研究のいま一つの重要な到達点は、報告者の今後の研究において、引き続き「徳川外交の連続性」を大テーマとしていくにあたり、主に外交儀礼の場を考察の軸とする方向を導き出すに至ったことである。平成 23 年開始の科学研究費補助プロジェクト（基盤 C）「徳川幕府の外交儀礼——近世アジア域内交流から幕末対欧米外交への連続性を中心に」にこれを引き継ぎ、ここまでの研究の上に成果を上げていく所存である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 佐野真由子「幕臣たちの近代」『出版ニュース』12月上旬号(2010年)、38頁。
- ② Sano, Mayuko, “Adoption of Asian Diplomatic Protocol to Receive an American Envoy in Edo, 1857”, *The XIXth Congress of the International Comparative Literature Association* “Expanding the Frontiers of Comparative Literature” Abstracts, August 2010, p. 48.

〔学会発表〕(計4件)

- ① 佐野真由子「安政四年十月二十一日、米  
国使節の登城・将軍拝謁をめぐって——  
『幕末』について考えるために」第172  
回日文研木曜セミナー、2010年9月16  
日、国際日本文化研究センター(京都)。
- ② Sano, Mayuko, “Adoption of Asian  
Diplomatic Protocol to Receive an  
American Envoy in Edo, 1857” 第19回  
国際比較文学会、2010年8月19日、中  
央大学校(ソウル)。
- ③ 佐野真由子「徳川幕府による米国総領事  
ハリスの迎撃をめぐって——適用された  
東アジア域内外交の事例」京都大学大  
学院法学研究科主催「20世紀と日本」研  
究会、2009年8月8日、ホテルグランヴィ  
ア(和歌山)。
- ④ 佐野真由子「筒井政憲と異国」幕末史研  
究会シンポジウム、2009年6月27日、  
武蔵野商工会館(東京)。

〔図書〕(計3件)

- ① 笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況  
と国際環境』思文閣出版、2011年(予定)  
)、(内、佐野真由子「引き継がれた外交  
儀礼——朝鮮通信使から米国総領事へ」  
計30頁)。
- ② 劉建輝編『前近代における東アジア三国  
の文化交流と表象——朝鮮通信使と燕行  
使を中心に』国際日本文化研究センター、  
2011年(内、佐野真由子「幕末の対欧米  
外交を準備した朝鮮通信使——各国外交  
官による江戸行の問題を中心に」(190-210頁)
- ③ 岩下哲典・小美濃清明編『龍馬の世界認  
識』藤原書店、2010年(内、佐野真由子  
「坂本龍馬と開明派幕臣の系譜——受け  
継がれた徳川の教養」115-152頁)。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐野 真由子 (SANO MAYUKO)  
国際日本文化研究センター・海外研究交流  
室・准教授

研究者番号：50410519